

## 効果的な少人数指導の在り方

佐賀市立城北中学校 教諭 高島 聡子 久保田町立思斉中学校 教諭 安岡 公美  
吉野ヶ里町立東脊振中学校 教諭 古賀 美加

### 1 研究の趣旨

佐賀県では、個に応じた指導の拡充のため、平成17年度より中学1年のすべての英語・数学においてTT・少人数指導が取り入れられている。このことにより、従来の一斉指導に比べて、よりきめ細かな指導を実施することが可能となった。

平成17年度佐賀県小・中学校学習状況調査報告書－学習意識調査－によると、中学1年の英語と数学の両方において、「分からない時、先生に質問しやすい」と回答した生徒は約6割で、情意面でTT・少人数授業を肯定的に捉えている生徒が多いことが分かる。しかし、「生徒のつまずきにすぐに対応できる」と考えている教師は約8割に対し、「勉強がよく分かるようになった」「自分のペースで学習できる」と感じている生徒は約3割であった。この教師と生徒の意識のずれを解消するためには、生徒のつまずきを見取って克服させる必要があり、そのことによって、すべての生徒に単元目標を達成させ、学習の達成感を高めることにつながるのではないかと考えた。学習過程における生徒のつまずきは、学習が行き詰まったり、誤ったりしているなど様々である。そこで、本グループではつまずきを「学習内容を習得させるときの障害」と考え、なかでも、「単元目標を達成できないつまずき」に焦点を当て、少人数指導の利点を生かして、つまずきを克服させることとした。具体的には、個のつまずきをテストで正確に見取り、その箇所や程度、原因を分類・分析し、その後、それを基に個の学習状況に応じた適切な援助を行って、単元目標を達成させる指導の在り方を探ることとした。また、英語と数学は、既習内容を理解していることが、新しい学習内容の理解の基礎となる教科なので、既習内容を入れた系統図や関連表を作成することにした。そして、それを基に、単元目標を達成するためには、どの既習内容を活用して学習を進めていけばよいかを分析したり、つまずきそうな箇所を事前予測したり、個に応じた手立てを考えたりすることとした。

このように、本グループでは、系統図や関連表を基に作成した見取りテストを実施し、個のつまずきやその原因となる考え方を分類・分析し、そこで明らかになった生徒の実態に合わせた小ステップの個別支援により、個のつまずきを克服させるという指導過程を取り入れた効果的な少人数指導の在り方を探った。

### 2 研究教科・領域等

中学校数学科と英語科（第1学年）において、研究課題の解決に向けて研究を行った。

### 3 研究の成果

#### (1) つまずきの見取りについて（次頁図1参照）

単元の教材分析や授業構想を行うために、その単元だけでなく、学年全体、更に数学では小学校の内容を踏まえて、系統図や関連表を作成した。そのことで、指導すべき内容とそれに関連する既習内容とのつながりが把握でき、つまずきの事前予測や次単元への発展にもつなげることができた。また、単元目標の達成状況や既習内容の習熟状況を見取るためのテストを作成することにした。まず、系統図や関連表を基に単元内容とそれにかかわる基礎的・基本的な内容を選び出して、つまず

きの箇所を事前予測した。次に、単元内容とそれにかかわる既習内容の両方を盛り込んだテストを作成することとした。このテストでは、つまずきの箇所、程度を把握し、生徒がどのような考え方をしているかを見取れるようにした。その結果、まったく理解できていない生徒はいなかったが、つまずきの程度は様々であり、主なつまずきの原因が、知識不足と知識はあってもそれが活用できないことの2点にあることが分かった。そこで、その結果を個人カルテや座席表等に記録し、個の習熟状況の把握とつまずき克服のための授業構成及び授業中の支援のための資料とした。

以上のことから、単元の習熟状況を見取るテストに、系統図や関連表を基につまずきを予測した既習問題を盛り込むことが、つまずきの見取りには有効であることが分かった。

(2) つまずきの克服について (図1 参照)

生徒の理解できている部分を見取り、それを生かしてつまずきを克服させるような手立てを講じることで、学力の定着を図ることとした。そのため、どのような学習活動を行って、どのように生徒にフィードバックしていくかを考えた。限られた時間を有効に使ってつまずきを克服させるために、1時間で指導する学習内容の精選を行い、効率的に授業を行うことにした。

まず、知識不足を補充するために、生徒の理解できているところを生かしながら再度分かりやすく説明し、基礎的学習内容の理解を深めさせた。次に、知識の活用ができないつまずきを克服するために、深めた内容を繰り返し演習させた。その際、学びの多様性に応じたワークシートを活用したり、つまずきの程度に応じて編成したペアやグループ学習を取り入れたりした。また、個別の答え合わせや声掛けをしながら、習熟状況を丁寧に見取り、知識が活用できていない生徒には、個別支援を繰り返し、修正しながら演習をさせた。最後に、確認テストを行って、定着度を見取ることとした。その結果、すべての生徒の個人内の習熟度が高まり、ほとんどの生徒が単元目標を達成できた。授業後、単元目標を達成できた生徒にはそれを評価したコメントを、達成できなかった生徒には学習のアドバイスや励ましのコメントを自己評価表や個人カルテに記入し、生徒にフィードバックした。このことで、学習への達成感が高まったようである。また、単元の目標を達成できなかった生徒もいたが、その多くの場合、つまずきが複合的に重なり合っている状況であることも分かった。それは、知識不足を補充したり、知識を活用させたりするための時間が不足したことが原因の一つであると考えられる。

以上のことから、つまずきをテストで見取り、それを克服させる学習を設定し、その中で、学びの多様性やつまずきの程度に応じたワークシートや形態を取り入れて、演習を繰り返すというこの指導過程は、生徒の習熟度を高め、達成感を高めさせることが分かった。

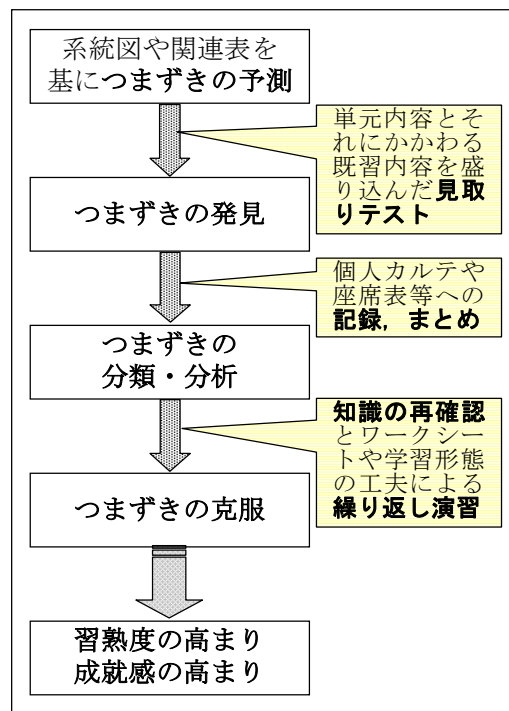


図1 つまずき克服までの指導の流れ

#### 4 今後の課題

- (1) 複合的なつまずきの原因を正確に見取れるテストの在り方
- (2) 1時間の中でつまずきを克服させ、すべての生徒に単元目標を達成させる指導方法の在り方
- (3) 複合的なつまずきを克服させるための援助の在り方